

「タイの仏教に学びたいこと」

山本 浄月

何時の頃からか私は「上座部仏教」と言うものを垣間見てみたいと思いはじめていた。現在それにかなう所と云えばタイ国やビルマ等がその伝統を比較的色彩濃く残している様にみえ、そして何とかしてタイ国の寺院にて体験する方法はないかと思いを持っていた。

なぜなら私は出家した身であり、仏道を行じてゆくことが私の生きる道であり一大事であり、この道を私なりに出家者としてしっかりみつめ、はつきりとその立場をつかまなくてはな

らないと感じた。

なぜかと云うとこれは私が出家して以来、色々と体験してゆく中に心におき上がってきた事であり、結局、釈尊の原点に一先ずどうしても立ち返って自分を出発させなくてはならないと思っただからである。

そこでさてどの様にしたらよいのかと考えると、出家者としての仏教を行ずる形態が初期の仏教に少しでも近い形を保っているのではないかと思われる方向へさかのぼらなくては仕方が

ないのではないかと考えたのがはじまりである。

勿論、日本に中国を経て北方系の仏教としてもたらされた大乘仏教を否定するものではない。それはそれで非常に発展し、ある意味では水平化されたすばらしいものであると思うし、又、我々もその中に居るのである。そして私は仏教が好きなのである。その故に私はその道をゆくべく出家を果たして幸せだと思っている。それは釈尊の教えに帰依したからである。

ところが日本に於ける現代の仏教、正確に云えば仏教集団なり教団、又は僧侶のあり方に首をかしげることが多い。果たして本当に仏道を行じていくだけの悲願を持ち得ている境涯にあるのであろうかと思うのである。

もちろん修行深き心涼しげな非常にすばらしい立派な方もお見うけする。そして心から尊敬の念を持っている。

然し、全般を眺めていると何か「これでよいのか？」と云う思いに陥るのである。

出家者はやはり出家者としての生き方があり、一般在家の人にとつての精神的規範を持たなくてはならないと思う。たとえ大乘の精神と云えども、俗に落ちた出家者では所詮無用の長物化し世の中に存在価値すら失い、僧侶イコール葬儀のイメージになりかねない。仏教とはもとと葬儀に関係があつたわけではない。まして現在の世相は葬儀社が僧侶を適当に使役させかねない有様である。やはり何かがおかしいのである。このままでは新しい世代になったら仏教ばなれして縁なき衆生となりかねない。二、三十年もつかどうかである。

仏教は死んだ人とのみつき合うのではなく、生きている人々ともっと日常においてつき合うのではなくてはならないと思う。

仏教が教えであり宗教であるならば人の心を

救うものでなくてはならない。そして、僧はそのために存在しなくてはならないのである。「生老病死・一切皆苦」、人の生きる世がつらい故に釈尊がそれよりの解脱を求めて悟りへの道を発見して下さったのであり、それが仏教として発



展してきたわけである。生きてある人々のために仏教は存在し、人の世をお互いに少しでも調和をもって生きるためにも、自らなるものを戒とし他動的なものを律とし、「戒律」が規範となつて仏教集団が形成され、その流れが約二千五百年も様々に発展されてきた。それは釈尊の説かれた真理が偉大であるからである。それを専門的に行ずるために出家するのが僧であるはずである。その真理に身をもって行じてゆく生き方をきびしく守ろうとするが為に僧は尊ばれて信仰を助けるものであるはずである。人の心に信頼と安心をもたらすだけの道力を持たなくてはならないであろう。それが専門家としての僧侶の布教である。

僧として生きるべき為には、仏教としてのなるべく原点に近い姿をはつきりと把握しておかなければ何のために出家したのかわからなくなりそうである。

私は臨濟宗妙心寺派に僧籍を置くものである。無論、禪堂での坐禪、公案の參禪、作務等の修行も意味があるし、すばらしい境涯へ導かれる道すじでもある。それも釈尊にまみえるための方法である。私にとってはこれらの体験は大変幸運であり喜びであり有難く大切に思っている。そしてまたまた続く修行の道と心得ている。

そこで私はもつと知りたいのである。学ばたいのである。インドに発してシルクロードを通り中国大陸を横断し朝鮮半島を経由してきた仏教。それは様々な風土の匂いもつけてやってきて、島国日本を一応ターミナルとして花開いたものである。そして最も大乘仏教的に花が咲いたとも云える。

特に明治以後は僧侶はあまり一般と変わらぬ生活のように見える。家庭生活をするのが普通になった。出家していないのかもしれない。この大乘の開花ぶりは中国、韓国の人々にとって

はいまだ卒倒しかねないショックの一つのようである。その様なことは私にとってははいかんともなしがたいので「ノーコメント」である。枝葉の問題としておこう。何れにしても尼僧は今のところ家庭を持たず結婚を放棄して出家しているのだから。故に身軽でどこに行こうと家に執着もなく、ボロを着て貧しく生きてても何の煩いがないのがありがたいと思っている。

そこでタイに於ける「上座部仏教」、「小乗」とも大乘の方で云ったのであろうがそちらも見なければ片手落ちの気がする。革新、改革されたものでもその元になるものがあつたはずでありルーツがあつて存在するものである。全体的にみようとすると「温故知新」が必要である。

保守的仏教と云われても古い伝統を守って続いてきたことはやはり尊い。そこにはやはりきびしいものが存在するはずである。

少なくとも改革派に走らず長い間、釈尊の時



代に近い形で教団を守ってきたものこそが変動はげしいよるべき混沌の時代に儼然たる出番であるのかも知れない。

おくればせながら僧となったからには僧侶の生き方をもっと学びたい。それ故に一応は出家至上主義？的集団に身をおいてみたいと願うものである。

今や仏教もヨーロッパ、アメリカ等にも伝播しつつある。日本にも求道者はやってくる。そういう人達にしばしば出会う。自分の今迄の宗教を捨ててとり組もうとする人達は真剣である。その時それらの人に対するに確たる出家の姿勢を持たなくてはやはり恥しい。それは日本の一般大衆に対しても全く同じである。

そのためにこそ私はタイに於ける仏教教団にその片鱗をみようと願うものである。それも私にとっての求道となるのであろうか。

タイに於いて色々と学んで来たいと思う。